

所属	心理学研究科 現代心理学専攻 修士課程	修了年度	2023 年度
氏名	小野 美保	指導教員 (主査)	小野寺敦子

論文題目	保育者が「気になる子」の支援に困難感を抱く要因 ——保育者効力感とエゴ・レジリエンスの観点から——
------	--

本文概要

【問題・目的】近年、発達障害児及びグレーゾーンの未就学児の割合が増加傾向にある。緒方（2020）によれば、これら「気になる子」の先行研究は、支援の困難感の要因として、主に保育者の職場環境や発達の特性に着目したものが多く、保育者自身の性格特性や発達障害に対する理解度を要因としたものが少ない現状があった。保育者自身の性格や考え方に焦点をあてると、小野寺(2015)によれば、“エゴ・レジリエンス (block,1965) が高い人”はストレスを溜めこまず、気分転換ができると述べられており、エゴ・レジリエンスの高い人は、対子ども場面において、相手の特性に合わせ、柔軟に関わると考えられる。また、濱田(2019)は気になる子への保育者の援助的関わりは、障害に関する知識と関連する可能性があり、知識的指標を含めた検討が必要と指摘している。一方、木曾(2013)は、発達障害傾向の子どもの保育や保護者支援の中で、保育者の発達障害に対する客観的知識・主観的知識との関連を明らかにしたが、発達障害の診断基準が DSM-5 以前の調査であった。本研究では保育者が気になる子に困難を感じる要因を、保育者効力感やエゴ・レジリエンスの観点から検討する。

【方法】1) 調査対象者：現役の保育者 200 名 2) 調査時期：2023 年 7 月 21 日～9 月 5 日
3) 調査内容：郵送法による質問紙調査（スマートフォン・パソコンからの WEB 版含む）①気になる子の困難さ(佐山他, 2016) 36 項目 4 件法。②Ego-Resiliency 尺度(ER89)日本語版(畑・小野寺, 2013)14 項目 4 件法。③発達障害特性に対する主観的知識尺度(木曾, 2013)項目を元に 17 項目 4 件法。客観的知識尺度(木曾, 2013)を参考に 12 項目 2 件法。④気になる子への保育者効力感 (三木・桜井, 1998) を元に 15 項目 4 件法。⑤フェイスシート：年齢, 雇用形態, 保育者経験年数, 担当クラス, 気になるお子様の有無, など尋ねた。

【結果・考察】現場経験年数と気になる子の保育困難感には 4 因子いずれも有意な相関は認められなかった。また、経験年数や年代別での一要因の分散分析でも差は見られず、気になる子の保育には、どの年代においても困難感があり、先行研究とも一致した結果となった。エゴ・レジリエンスと主観的知識・客観的知識および保育者効力感が、気になる子の困難感に与える影響を、共分散構造分析によって検討したところ、エゴ・レジリエンス得点の高さや主観的知識得点の高さからは、仮説段階で検討した困難感への直接パスは得られず、保育者効力感を介しての影響があることがわかった。モデル適合度は $X^2=6.30$, $df=6$, $p=.21$, $GFI=.98$, $AGFI=.90$, $CFI=.99$, $RMSEA=.02$ となり、十分な値が得られた。最終モデル検討の結果、保育者効力感が高いほど、気になる子への困難感を感じにくいこと、保育者効力感にはエゴ・レジリエンスの高さが影響する事が確認され、気になる子の特性に対する柔軟な発想やポジティブな関わりがあれば困難感は減少していくと考えられる。先行研究でも、田中・渡辺(2017)は、保育者を対象とする研修プログラムを実施したところ、終了後の参加者アンケート結果において、研修後の方が支援を必要とする子どもや保護者に対する支援の困難感が、軽減される傾向が示されたことを報告している。さらに日光(2018)は、定期的な巡回、カウンセラーの介入により、保育者がある程度の効力感を保ちながら気になる子の保育を行えるようになったことを明らかにしている。外部サポートにより、保育者の効力感や意欲を高め、エゴ・レジリエンスや主観的知識を高めることで、困難感が軽減する可能性が示唆された。